鳴海周平の全国ぶらり旅 高知編

ゆずの通信販売で、見事村おこしに成功し、全国から熱い注目を集めている高知県馬路村。「人口1300人あまりの村が、全国に発信してきた元気の源を体感したい！」そんな想いで、ちょうどゆずの収穫期を迎えた高知県を訪れました。

▲『高知龍馬空港』誕生の記念すべき日でした

その日、高知空港は何やら騒がしい雰囲気に包まれていました。

「いいなあ、南国は。北海道の寒い冬と違ってやっぱり活気があるねぇ。」

などとのん気に構えていたところに、いきなりテレビカメラが現れました！

「すみません、高知テレビですがちょっとよろしいですか？」

「そ、そんなこと急に言われても心の準備ってもんが・・・」と言い出す前に、次々と質問が・・・

「今日はどちらからですか？」

「今日は何の日かご存知ですよね？」

「記念すべき日のご搭乗おめでとうございます！」

何がなんだかわからないままとりあえず外へ出てみました。

大きな垂れ幕には『高知龍馬空港本日誕生!!』の文字。そうです、高知県の生んだ維新の立役者、坂本龍馬の誕生日であり命日でもある11月15日にあわせて、『高知空港』が『高知龍馬空港』へと名前を変えた歴史的瞬間に立ち会ってしまったのでした。人名のついた空港は日本で初めてとの事。どおりで騒がしかった訳です。（ちなみにインタビューの模様は、後日全国放送されたそうです。私は見ていませんが・・・）

歴史の中のヒー

▲坂本龍馬生誕の地にはたくさんの花が供えられていました

▲当日だけ配られた搭乗記念証明書

▲空港内の駐停車禁止の看板。温かな人柄を感じさせます

▲生誕の地に隣接するベンチ。いたるところに龍馬の息吹が感じられます

ロー、坂本龍馬との突然のご縁に驚きながら、さっそく龍馬ゆかりの地である桂浜を訪れました。

「どちらから？北海道！そりゃぁえらい遠くから来なさったねぇ。」

と声をかけていただいたのは土佐観光ガイドボランティア協会の岩崎義郎さん。

岩崎さんは長年勤務していた紡績会社を退職後、平成元年から土佐観光ガイドボランティアを始め、今年で15年目というベテランガイドさんです。

「鹿児島ではね、西郷隆盛のことを西郷さん、と言いよるね。山口県では高杉晋作のことを高杉さん、という。吉田松陰も吉田先生と呼ばれとる。ここじゃ坂本龍馬は龍馬でええんじゃ。皆～んな龍馬が大好きやけぇね、そう呼んどるんよ。」

▲土佐観光ガイドボランティア協会の岩崎さんと龍馬の銅像前で

桂浜に立つ龍馬の銅像は、昭和3年に土佐の青年有志が全国に募金を呼びかけて造ったもので、集まった寄付金は2万5千円（いまの金額で約8、000万円）にものぼったそうです。1835年11月15日に生まれ、1867年11月15日にこの世を去った歴史のヒーロー坂本龍馬を慕い、この日も全国各地から龍馬ファンが訪れていました。

▲銅像の龍馬は太平洋を見つめて建っています

「土佐に来たら、オナガドリも見ていかんとねぇ。」

観光ツアー客のそんな会話を小耳に挟んでしまい、もう興味津々の私はすぐにオナガドリセンターに直行しました。

戦争時の食糧難などにより、一時はほんの数羽まで減ってしまったというオナガドリは特別天然記念物となっています。性格はとてもおとなしく、1日に約30分の散歩以外はほとんど箱の中で暮らしているそうです。尾の長いものは12メートルにもなるといいますから驚きですね。

▲特別天然記念物となっているオナガドリ

翌日はゆずの里、人口約1300人の馬路村へ向かいました。

▲ケンカ犬で有名な土佐犬の子供。子犬とはいえ迫力満点でした

高知市内から1時間ほど走ったあたりにちょっと気になる建物がありました。

止まってみると、なんとそこは映画館！昭和30年に建てられた映画館をそのまま使ったという、とてもレトロなものでした。そして中に入ってまたまたびっくり。壁一面に貼られた年代モノのポスターに、まるで昭和の初めにタイムスリップしたかのような錯覚に陥りました。

「上映は月のうち1週間くらいだね。あとはイベントとかよくやるね。」

そう言って迎えてくれたのは館主の小松秀吉さん。

「全部埋まっても100人入るかどうかなんだけど、たまに僕もコンサート開くんだよ。」

小松さんはシンガーソングライターとしても活躍していて、地元でも有名人。なんと、これから伺う馬路村の公認テーマソング「ごっくん馬路村のうた」も小松さんが作詞作曲されたそうです。

「いいところでしょー、高知は。ゆっくりのんびりしてってねー。」

温かい小松さんの笑顔に、たくさんの元気をいただきました。

「ゆず畑が目立ってきたなー。」と思ったら、馬路村に到着していました。

「遠いところお疲れやったねぇ。ゆずがちょうど旬でねぇ、いい香りやろぉ。」

とびきりの笑顔で迎えてくれたのは、馬路村農業協同組合の代表理事である東谷望史専務でした。

今ではすっかりゆずの村として全国的に有名になった馬路村ですが、通信販売という現在のスタイルに定着するまでにはたくさんの苦労があったようです。

「初めはね、デパートとかの物産展で

▲壁一面のポスターはどれもプレミアもの

▲昭和30年当時を想わせる山の映画館『大心劇場』

▲「ごっくん馬路村のうた」を歌ってくれました

▲CD「ごっくん馬路村のうた」

▲村のあちらこちらにゆずが見えました

▲馬路村農業協同組合

販売していたんよ。味が良いし、健康にも良い、ちゅうことで少しずつやけどファンが増えてきてねぇ。こうやってご縁の出来たお客様に直接ご案内をしているうち、少しずつ現在の通信販売の形が出来上がってきた、ちゅうわけさ。」

――「いつかは清流のある故郷の村に帰りたい。」中学から村を離れていた東谷さんが故郷の馬路村農協の職員になったのは20代半ば。村の面積の97%が山ということもあり、もともと林業が盛んで、やなせ杉などの銘木も多い村でしたが、林業の衰退と共に過疎化が進み、だんだんと寂しくなっていく村の様子を見て、東谷さんは「何とか村を元気にせんとならん」と思ったそうです。

▲農家の人たちが毎日ゆずを運んできます

▲全国で大評判のゆず加工品

「龍馬が好きでねぇ。小ちゃい頃から憧れとったよ。自分も一緒の時代に生まれたかった、って何度思った事か・・・。そしたらねぇ、ある日夢に龍馬が出てきたんよ。それでこう言ったんだ、『今の時代にもできることはたくさんある』ってね。それで目が覚めたね。よし、何がなんでもゆずを形にしてやる！って決めたんだ。」

現在、加工工場も含めゆずの通信販売に携わっている社員さんは約60名。ほぼ全員が通年雇用で、村の活性化にもたいへん大きな役割を果たすようになりました。

そして、村おこしの成功例として注目を集めるようになり、全国各地から多くの自治体や企業が視察に訪れています。

「田舎にも様々な形でのチャンスがある。馬路村のゆずの通販が、全国の田舎を元気にすることにつながってくれればこれほど嬉しいことはないねぇ。」

村おこしに関して様々な受賞をしている馬路村と東谷さん。

「人の喜ぶ顔がいちばん嬉しい。」そのひと言に成功の理由を感じました。

龍馬の故郷、高知県。今回もまた、たくさんの素敵な出会いをいただいた旅でした。

▲東谷望史専務と一緒に土佐名物『土佐ジロー鍋』をゆずポン酢でいただきました
（もちろん馬路村のゆずポン酢です!）

桂浜観光案内所　TEL088-842-0081
山の映画館　大心劇場　TEL0887-38-7062
馬路村農業協同組合　TEL08874-4-2211